

井上馨侯の別府潜伏と

その前後

長谷部 吉貞

一、袖付橋の襲撃

井上聞多は、文久三年（一八六二）五月、に長門守廣定（藩主毛利公の世子）からの内命で英国へ密航、四国連合艦隊下関砲撃事件の報を聞いて、伊藤俊輔（後の博文）と共に帰国、豊後杵築藩の領地姫島へ上陸、ここで庄屋の古庄寅次に介されて「萬屋」藤本新助の船で周防灘を渡り帰藩した。

そして、三年後の元治元年（一八六四）九月二十五日山口城外の袖付橋付近で俗論派の刺客四人に襲撃されて全身十三ヶ所にも及ぶ傷を受けた。

その場面を少々再現すると、
まず、御前会議を終えた後、広沢兵介宅にて酒肴の飲

待を受けて下男の浅吉を連れて帰宅途中、袖付橋を通って一本松に差し掛かった所、闇の中より「井上か」と声がした。返答するや否や不意に斬り込んで来て、まずは左頬から顎にかけて斬られた。そして後へよろめくと背後から足を払われたために前にのめり倒れ込んだ。それと同時に胴へ向け横から一文字に斬られたが、前のめりに倒れ込む時、刀の柄頭が地面に当たりその弾みで刀が背中に回ったため、傷は重かったが胴斬りは免れた。さらに止めの一刺しが胸元めがけてきた。しかし、「カチン」という音と共に外れた。するとその時、下男の浅吉の急報に人の集まる気配がしたため四人の刺客は四方に逃げ散った。

ここでちょっとした艶話がある。井上は、内命で英国へ行くことが決まった時、京都祇園の「君尾」という馴染みの芸妓に逢いに行った。まさか、内命で「英国へ行く」とは言えず、なんだかんだと嘘を並べて「もう逢う事が出来ないだろう」と互いに別れを惜しんだ。この時、井上は君尾から形見として手鏡を買った。この鏡というのが現在のガラスではなく、金属を打ち延ばし磨き上げ

たもので、襲われた時これを懐に入れていたため止めを免れたというのである。止めを刺されずに済んだのは間違いないのである。

話は元に戻り、兄の幾太郎が駆け付けた時には虫の息であったという。屋敷へ運ばれ医師を呼んだがどうにも出来ず黙って見ていただけであった。そこへ急を聞きつけて親友の「所郁太郎」がやって来た。この人物は、美濃の国安八郡の郷土で、勤王の大義を唱え諸国を回り大坂にいた頃、緒方洪庵の門に学び外科の手術などの助手をしたりしていた。縁あって山口城下に落ち着いた人である。所はすぐさま傷の縫合をしようとしたが道具が無い、考えた挙句に井上家へ二三日前から置屋が入っていることを思い出し、畳針を曲げ、それで傷口を縫ったという。

全身十三ヶ所、五十数針も縫い終わった頃には夜は明けて：つまり一晩中縫っていたという事である。緒方洪庵のところまで助手をしていたというだけで、とりわけ名医という訳でも無く、また、現在のようにちゃんとした麻酔がある訳でもなく、酒か焼酎で消毒する位だろう。

縫われ多方も縫われた方だが、縫った方も縫った方である。ちょっと気の利いた人なら反物の二三枚位は縫ってしまおうだろう。しかし、何はともあれ、この「所幾太郎」のお陰で井上は一命を取り留めたのだから、結果として名医なのだろう（と思う）。

二、別府潜伏

慶応元年（一八六五）二月上旬、井上は伊藤俊輔等の勧めもあり、傷の養生を兼ね下関より船で別府へ逃れてきた。伊藤と相談の上武士の格好は駄目なので町人、町人よりは土方の親分の方が良からうという事になり、名前も「春山花輔」とした（奈良屋文七という説もあるが定かでない）。そして、この時女性を同伴している。名を「お静」といい、井上が下関へ出かけた際は常に呼んでいた芸妓という。さて、別府に着いた二人は別に決まった宿がある訳でもなく、船頭の勧めで港に近い（旧棧橋・現在の楠理立地）流川のそばの旅籠「若彦屋」へ宿をとった。この当時はまだ宿の部屋から釣りが楽しめたという事である。

さて、宿へ入ると主人彦七は着物の裾よりチラリと見える傷や、立ち居振る舞いなどを見てただ者ではないと見抜き、それとなく見ていく事にした。

井上は宿の内湯には入らず（傷を見られ色々詮索されまいと）夜遅く人目を避けて楠温泉へと行っていた。

しかし、そのうちに一人、二人と見られていつの間にか大評判となり彦七の耳にも入った。ある日いつものように楠温泉へ行った時のこと、身ぐるみ一切合財盗まれてしまった。困り果てた井上は、お静の持っていた僅かな金でお静を急遽伊藤のところへ帰した。（これ以後お静は別府へこなかった）用件としては金の用立てと、長州藩の状況を知るためのものである。

それから後日、宿の主人彦七は、傷の事が町で評判になっていくし、井上の素性も気になるので部屋へ訪れ世間話をしながら、ころあいをみて「一目見た時より、いざれ御身分のお方だと思いますが」と話を切り出したが、井上は「土方の親分」という事で通したので、彦七はそれ以上は聞かずにそれからは義気で井上を庇護した。

また、彦七に介され博徒の傍ら土方人足の元締めをし

ている「灘亀の親分」という人を介された（豊前長州の漁師の子息で名を亀吉という）。別府を中心にしてこの海浜一帯を「灘」と称した所から「灘の親分」から名前の一部を取って「灘亀の親分」と呼ばれるようになったらしい。

井上はこの灘亀に大変気に入られ親分子分の盃を受けている。灘亀の所へ出入りしていたある日、他の子分達から無理に丁半博打に誘われ、最初は大胜ちした。（この時、お静から事情を聞いた伊藤より書状と五十両が届けられていた。この金を元手にして百両も勝っていた）。だが、二度目には一銭も無くなってしまった。困り果てた井上は灘亀に頼み、楠浜の別府湊付近で工事人足をして金を稼いだという。その後、楠温泉で湯治巡りをしていくという白杵藩の武士と知合い、気に入られて荷物持ちの人足を頼まれて鉄輪まで行ったらしい。

それから、間もなく国許より迎えの使者が訪れ、井上は、若彦屋彦七と灘亀の両名に今までの礼を言い、本当の氏素性をあかして別府港より船で下関へと帰った。

三、別府再訪

明治三十二年（一八九九）伊藤博文公が九州へ遊説に出かける際、井上侯は「九州は別府へ行く事があれば、昔俺が潜伏していた当時の事をわかるだけ調べてくれ」と頼んだ。伊藤公は、九州遊説の途中福岡の財閥で別府に別荘を持っている麻生太吉氏の別荘「五六庵」（中央公民館の敷地内にあった）に一泊した。この際に調べてもらった結果「旅館はまだ現存している」と分かり、帰京後井上侯へそのことを伝え別府行きを勧めた。しかし、都合がつかず、また大病を患ったりしてなかなか実現しなかった。

時は過ぎて明治四十四年（一九一一）ようやく実現する事になり同年五月二十四日井上侯は三池（福岡県）の貝塚太助氏に「若彦屋」の調査を依頼、貝塚氏は麻生太吉氏と相談の上、高山篤太郎という人を直ちに別府へ向かわせた。高山氏はまず町の古老に聞いてみたが思わしい話は聞けず、「元町長の山田三郎氏なら何か分かるかも知れない」と教えられ訪ねてみたが、ここでも分からず、今度は助役をしている日名子氏を紹介された。しか

し、日名子氏も分からず今度は町会議員をしている和田彦蔵氏を紹介された。

ところが、和田彦蔵という人は高山氏が調査をしている「若彦屋」と縁類であったのである。

若彦屋の離れ

若松屋は三代目亀四郎が相続した際に屋号を「若松屋」とした。建物も少し大きくなったが、井上侯が潜伏していた部屋はそのまま残っていた。

同年五月二十九日午後三時頃井上侯一行は、



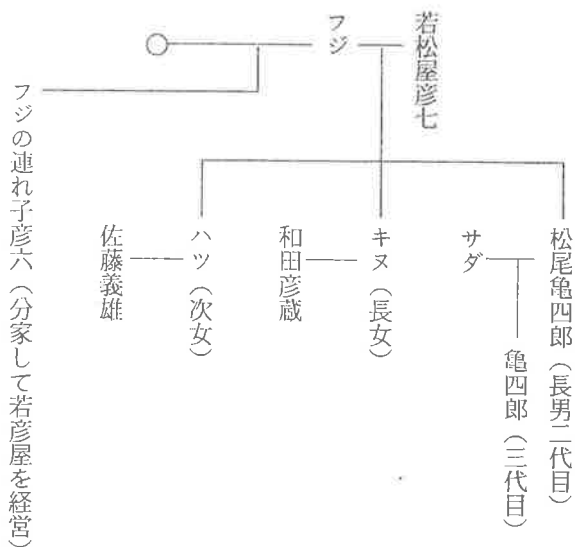
千葉大分県知事・吉田町長・日名予助役などが出迎える別府駅へ降り立ち、麻生太吉氏の別荘へ入り「若彦屋（松尾）彦七の遺族」と対面した。

その際井上侯は「彦七や灘亀が生きていれば……」と残念がったという。かわいがられたという次女の佐藤ハツは、なにせ四十七年振りの再会であるからして記憶も薄れがちであったが、親から「あの人は長州の偉い方なので失礼の無いように」と言われた事などの思い出を話した。さらに、「あの時、女性の方がご一緒に確かお静という方でした」と言い、そのことを知らないまわりの一同は驚いて井上侯の方へ目をやった。すると、井上侯は笑みを浮かべ「今日あって明日の命の知れぬ時、そういう事もあっただろう」と言われた。

翌、三十日井上侯は若松屋へ赴き潜伏当時を懐かしまれ、遺族と共に記念撮影をされた。『千辛萬苦之場』の扁額はこの時に揮毫されたという。

さらに楠温泉へも赴き盗難にあった当時のことなどを懐かしまれた。

「若彦屋松尾氏系図」



四、「灘亀」

「灘亀の親分」こと亀吉は、年号も明治となり国民は皆すべて苗字を付けねばならなくなった時、別府へ移り



再び別府を訪れた井上馨侯

住んでいた同郷の者が永井を名乗ったので自分も永井を名乗った。そして、明治三十五年（一九〇二）八月三日に没した。享年六十七歳であった。私の聞いたところでは、墓は最初浜脇二丁目二区十四組崇福寺にあったという事であるが、現在は市宮芝尾墓地にある。

亡くなる二三年前より両眼を患い歩くことも困難になった時など「天罰が下った」と言って相手にする者も無かったという。それを聞いた井上侯は「土地の者には嫌われでも私にとっては恩人である。」と言われその晩年を庇護された。なお、永井亀吉には佐藤常藏という甥がいたが、落ち目になってからは寄り付きもせず、亡くなった後葬儀にも出なかったという。

晩年は同郷の誼よじで永井平吉・イワ夫婦が最後まで面倒をみた。井上侯は、若松屋一族および永井平吉・イワ夫婦に対して金一封を贈り、永井亀吉の法要を盛大に営み墓標を建てた。

昭和二年（一九二七）井上馨侯の嗣子井上勝之助侯爵は、病氣療養のため別府を訪れた。その際永井亀吉の墓に参拝した。この時に風水害で荒廃していた墓を改修し

た（この時芝尾墓地に移転したのではないかと思う）後
大法要を営んだ。

その後、別府市は麻生太吉の別荘「五六庵」の敷地に
昭和三年公会堂を建てた。その敷地内に、潜伏の家屋を
松尾家より家屋並びに記念物一切の寄付を受けて移築し
て、昭和八年新たに記念碑をも建設して永久に保存する
事にした。なお、平成五年現在地へ移動した。

最後に、これを編集するにあたりご尽力をいただいた
豊田文一氏に紙面をお借りしてお礼を申し上げます。

参考文献 「伊藤博文・井上馨」全集 伊藤痴遊著

「別府潜伏時代及其前後の井上馨侯」

編集・発行別府市役所

多賀神社のこと

八幡籠門神社境内鎮座

土屋 公 照

国立別府病院の西方に、宇佐八幡宮の末社である八幡
籠門神社がある。この神社境内に多賀神社が祭られてい
る。「多賀さま」の愛称で親しまれ、虫封じや女性の願
かけて亀川はもとより豊岡・日出・大神などからの参拝
者が多かった。

昭和三〇年頃まで、農閑期になると豊岡・日出方面の
若い母親が幼児を連れ、三々五々誘いあってお参りに来
ていた。当時、こどもの虫封じに「多賀さま」に参拝す
るといふことは、姑・小姑から離れ公然と母子で外出を
楽しめる唯一のチャンスであったのではなからうか。参
拝後、拜殿で弁当を広げている姿、まるでピクニックに
来たようではほえないものがあつた。

虫封じとは、小児のひきつけを治すこと、つまり疳の

